

南分、^②随喜功德品第十八」とある。

また室町初期と推定される『葛城峯中記』には、「黒極多輪、柱本随喜功德品第十八、大日堂」とあって、葛城二十八品の第十八経塚が紀見峠の柱本にあると明記されている。そして「大日堂」とある。

いま柱本に極楽寺があり、修験の寺、小峯寺の末寺である。本尊は大日如来であり、寺は柱本の中程にあり、室町初期に「大日寺」と呼ばれていたのかも知れない。

加太、向井家の江戸初期と推定される『葛城峯中記』には、「紀伊見峠、虎屋源兵衛泊」「柱本金剛童子」とある。葛城二十八宿の巡行の折、紀見峠の虎屋で宿泊した記事である。

紀見峠は、柱本村の支郷で柱本のなかの一集落である。そして「虎屋」は、紀見峠の脇本陣として街道集落の中ほどにあり、いまも土塀と屋敷が残り、昔の面影をとどめている。

当時の烏丸資慶の紀行『高野山略之記』にも紀見峠の様子について、「峠にのぼりぬれば、旅人の為にむすびをけるいはりあり。やすらいてそこらとひきけば。此山なんかつらぎの峯つとぎにて。むかひのしげれる嶽にても。行者のおこなひすなるといへば。

しら雲のよそにかけこし かつらぎのみねのつとぎを

けふぞこえぬる」

と記しているように、葛城修験の行者が、この紀見峠を今日も越えていったとある。

岩瀬の経塚

これに対して、幕末の嘉永三年（二空）の大鳴山智航上人の『葛嶺雑記』には、天見不動から紀見峠をへて現在の橋本市境原の修験の寺、小峯寺に向かう折、河内長野市の南海高野線天見駅東方の岩瀬の山を「岩瀬の経塚山」として、「不動の段より山つづぎ、しかし通路なし遙拜、妙随喜功德品第十八之地」とし、

武士の 岩瀬の玉や光るらん

経塚山を 守るいさおに

と詠じている。ここにいう「武士」は、南北朝の戦いで敗れた南朝方とりわけ楠正成らの戦功を弔っての歌である。

この峰の尾根つづぎに、旗尾岳がある。地元では「天見富士」といい、標高五四八呎の中世の山城があったところで、千早城の物見の岩であったと思われる。山頂はやや平坦な杉林で少しの岩が散在しているだけである。

②釈迦の入滅後も、法華経を聞いて喜び、それが世の人にも広まって功德となる。



柱本の極楽寺



旗尾岳の山頂

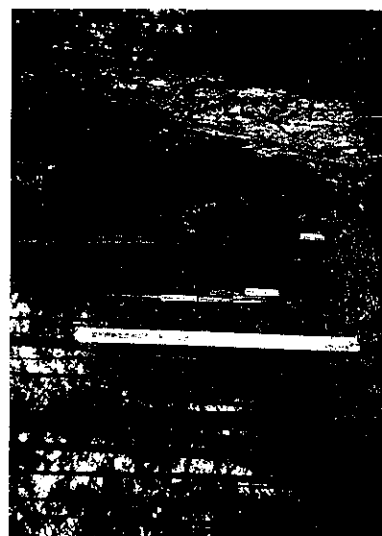
この岩瀬の経塚山へは、一般に南海高野線千早口駅の上岩瀬から東へ、途中の塞の神谷から谷ぞいに府庁山の手前まで林道を登り、右に回りこんで急登した独立峰にある。また天見駅からは旗尾岳に登り尾根ぞいに府庁山の手前で左に折れるコースと、天見駅の南、蟹井八幡を東へ島ノ谷から十字峠経由で府庁山を北へ向かうコースもある。

いずれも経塚山の西麓から木や草をつかんでよじ登る急斜面の山である。山頂に二基の和泉砂岩の石碑がたち、経塚の白い案内ポールがたっている。手前の南面する石碑には、「妙経隨喜功德品第十八岩橋山経塚」、裏面に「昭和二十六年十月吉日建之、願主三井修験天台寺門宗、名古屋市早川宗治」と戦後の新しい石碑である。

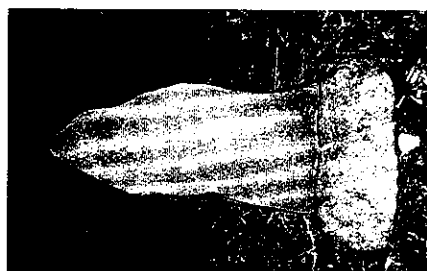
その後に西面して「葛城峯中七霊回向塔」とあり「昭和三十六年、三井修験天台寺門宗宗務総長中村謙寿」と刻されている。おそらく葛城修験の先達たちを供養したもので、山中他界の思想を物語っている。

ここも檜の木に、聖護院・那智山・犬鳴山のほか、大峰大先達法静院林寺の碑伝が貼られていた。

このようにみると、葛城二十八品の第十八経塚は、少なくとも江戸時代の初期には紀見峠の柱本にあり、その後、幕末には岩橋の山に移転したとも考えられる。



岩瀬の経塚山(右)と葛城峯中七霊回向塔碑



二、峰の行者道と麓の修験寺

東ノ行者と西ノ行者

紀見峠から千早峠への尾根筋に、「東ノ行者」と「西ノ行者」がある。大阪府と和歌山県の境を通るダイヤモンドトレールは、葛城修験の行者道なのである。

紀見峠から少し天見に下ると東への山道がある。少しずつ登ると、巨木の森があり平坦な広場にでる。「山ノ神、標高四五〇呎、金剛生駒国定公園」の標示板がある。右手の森の中に不動明王の石像の入った小祠があり、大遺水の宿ともいわれる遺水不動である。ここへは紀見峠の集落からも金剛山への登り道がきている。少しで葛城の峰への急坂となり長い丸太階段の道がつづくが、電送鉄塔の尾根につくと展望は開ける。

ここからの尾根道は快適で、杉・檜の植林帯は夏でも涼しく、ウグ

「遺水不動」の森



三、神福山と大澤寺

神福山の経塚

奈良県五條市と大阪府千早赤阪村を結ぶ千早峠の西に、標高七九二
 分の山容のきわだった神福山がある。

この神福山から南流する水沢谷に望んで、その名も神福山大澤寺が
 ある。

五條市街から寿命川にそって車道を大澤寺まで登ると、静寂な寺域
 に紅葉で有名な寺の塀が見える。古くから「五條十八景」の一つとし
 て地元では親しまれている。神福山へは寺の裏から「ギリサコ尾」と
 呼ぶ急な尾根を登ると、東ノ行者のある行者杉につく。これより東へ
 下り、国道三二〇号の金剛トンネル上の鞍部からまた登りかえすと神
 福山頂である。

山頂は、やや平らな檜林で笹原となっており、第十九経塚と二棟の

の寺もいまは修験の寺として、眼病、中風除け薬師として地元の尊崇
 が厚い。そして本堂に高野山円通律寺の碑伝が貼られていた。

この寺は、『諸山縁起』『葛城峰宿次第』の中世以来「左久米寺、本
 仏薬師」として、古くから修験の行所として著名であった。

江戸初期の向井家『室中記』にも「セイ堂、寺坊あり、古記に赤面
 寺、又左の久米寺、今、東覚寺と云」とあり、「本堂薬師如来、金剛
 童子、八大龍王」とあり、『紀伊統風土記』も「境内に八大龍王、葛
 城明神社あり。高野葛城先達の行所なり」と記している。扁額のように
 兵火のあとは、戦後になって本堂裏に八大龍王と葛城明神の祠、そ
 れに本堂前に鐘楼が再建された。

山内の真徳寺



③復刻版第二輯八五頁。

大澤寺



祠がある。

経塚は土盛で約二辺四方を石で結界し、高さ約五〇雫の土盛の上に一字一石の石を一個おいて経塚を示している。以前にこの塚から三面の鏡が出土したと報告されている。

経塚の右に、「バク(釈迦如来)妙経法師功德品第十九之地」とあり、裏面に「昭和六十三戊辰年四月吉日建之、泉州大鳴山修験道」と刻した新しい花崗岩の標石と、左側に花崗岩の花筒がある。檜の木に碑伝が五枚貼られていた。

智航上人は、

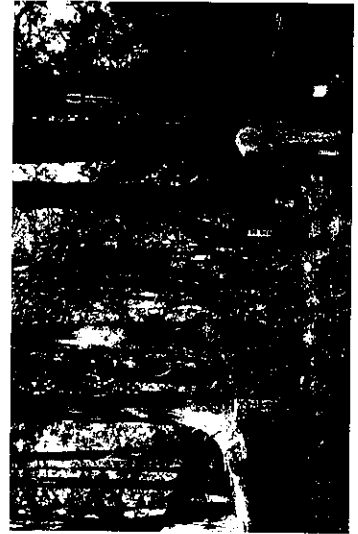
大沢の山は高野の行ひに

法の林を しおりとぞ聞く

と詠じている。智航上人の『葛嶺雜記』には「此の山の嶺上を神福山といふ。茂みの森あり、鶯の窟あり。常光童子立せ給ふといへり。また嶺の林を経塚なりといふ」とあり、岩窟と経塚を記して「法師功德品第十九之地」としている。江戸初期の向井家『峯中記』には、神福山神福寺があったが、「寺坊遷転」とあり、江戸時代には麓の大澤寺に諸尊も移転したと推定される。

経塚の左、石組の上に、高天山(金剛山)佐太雄神社の木製の小祠

①法華経を読み説いた法師は、六根清浄の功德を得る。



神福山の経塚

が祀られている。この社は大澤寺の守護神であり、雨乞いの神でもある。また山頂から西へ下ったところに朱塗りの小祠があり、神福大金権・龍王神・大久保家祖神の三体が祀られ、地元の「山の神」の信仰が生きている。この道を下ると、石見川から五條に越える谷尻峠の鞍部となり、昔はこの付近から谷にそって大澤寺への道があったといわれている。いまはこの峠の下を国道三一〇号五條線が通る金剛トンネルとなっている。

金剛山七坊の大澤寺

『大和名所図会』には「真言修験道也」とあって、^②「大澤寺畧縁起」には、役ノ小角が一字の草堂をむすび薬師如来を勧請し「瀬之堂」を開基された。のち空海が伽藍や真言行者の僧房を建立して真言修験道の靈場が確立した。その後、南北朝時代には仁和寺の別格本山となり一二の塔頭をもち諸国に末寺を持つにいたった。また後醍醐天皇の勅願所となり、紀州名手庄二五町の田地を有し、後村上天皇は瀬之堂を行宮とされ、のち京都聖護院法親王から「柳の宿」の庵号を賜っている。江戸時代には紀州徳川家の祈願所であり、高野大先達による柴灯護摩法会の嚴修など、「金剛山七坊」の一寺としてその歴史は古い。

②大澤寺刊行パンフ。

大澤寺の本堂

